

子どもと家族と学校と

①『アルバイト20時間分のカウンセリング料金』

中島 弘美

CON カウンセリングオフィス中島

急いでカウンセリングをお願いします

12月に入り、寒くなったと感じる日の朝、私立高校の教育相談担当教員から、「大急ぎで面接をしてもらいたい家族がいるのです」と電話が入った。

急いでいるのは、子どもが危機的な状態にあるというわけではない。卒業するためには、今のままでは規定出席日数に足らないので、カウンセリングを受けて、何とか再登校に結びつけたい、というのがその理由だった。

高校には専任のカウンセリング担当者がいるものの、本人が、男性のカウンセラーだと話しづらく、校内に設けられたカウンセリング室に行けるぐらいなら、教室に入れる、なので学校のカウンセリングは無理と話している。

急いでいる事情がつかめてきた。

オフィスには、学校からの紹介で家族が相談に訪れることが多いが、カウンセリングを効果的に進めるためには、紹介先である学校との関係が、大きく影響をする。

学校から厄介者扱いをされて相談に来られる場合や、家族に問題があるからカ



ウンセリングに行くようにと言われ、納得できない様子で、来られることもある。

今回の先生は過去に何度も紹介の経緯があり、情報交換をしたり、ともに方針を立てたりして、子どもと家族を支援してきた、いわば協力的な学校組織だ。

無理な要求をする先生ではないこともわかっている。それに、学校内の調整役やまとめ役、一定の権限を持っているキーマンでもある。当オフィスと紹介先の高校はとても良好な関係であると考えられる。

関係者の連携は築けているが、家族に会ってみたいとわからないところもあると思いながら、

「それではできるだけ近いうちに来ていただけるよう、こちら準備しておきます」と返事をした。

引き続いて、母親から予約希望の電話が入り、さっそく、家族と会うことになった。

ほっそり娘の高校三年生と大柄な母

母親とともに高校三年生のマナミが面接にやってきました。家族面接は父親の参加をお願いすることがあるが、来所できる人からまずは来てもらおうとの判断から、母と娘の二人の来所となった。

ゆっくりした動作でマナミが面接室に入ってきた。手足は細く、さらさらの長い髪。色は白い。一方、母親は身長が高く大きい、そして日焼けしている。体を小さく丸めながら椅子に座った。

「学校の先生からのご紹介で来られたのですね」面接が始まった。

卒業するためには欠席は一日も認められず、新学期からは休まずに登校しなければならないという。その内容は厳しい条件だった。

「マナミさん、よくお越しいただきました。お母

さんから少し様子はいかがでした。これからのことなのだけど、できる、できないは別にして、どうなったら良いなど、思っていますか？」

「……卒業したい」

しばらく間があったものの、しっかりとした言葉が返ってきた。

「卒業したい、そう、卒業したいよね。うん。卒業したあとは？どうしたいと思っているのかな？」

「卒業できないかもって思っていたから、あんまり考えていない。前は、大学に行こうと思っていた。今は、コンピューターの専門学校に行けたらいいかなあ。よくわからない。探してないけど」

とまどいながらも、専門学校の話をしていると、少しずつマナミの表情が和らいできた。

「先日の個人懇談のときは、てっきり留年の言い渡しだと、覚悟をして学校に行きました。でも、このあとすべて登校したら、卒業できる可能性があるといわれて、それで……」と母。

「それでここにも来ました」と今度はマナミから話す。

厳しい条件を示されながらも、この時期に学校からカウンセリングをすすめられるということは、卒業を踏まえてのことかもしれないが、勝手な解釈はできない。

どちらにしても、高校では卒業できるかどうかの話ばかりで、その先については何も描かれていない。留年することになったとしても卒業ができるとしても、これからどうなりたいのかの話を投げかけることで、将来を考え、一歩踏み出せる機会になるはず。

マナミの身にこれまでどんなことがあったのかの『過去調べ』ではなく、これからどうなりたいのか『未来を見つめて』の話を中心に面接が進むことになった。

つねづね面接では、『なんで？』という言葉、できるだけ使わないようにしている。この問いかけは人を責める言葉になりかねないからだ。『なんで、こんな状況になったのですか？』の質問は、まるで本人にすべての原因を押しつけるように感じるからだ。なんでといわれても困るばかりだ。なんで？よりもどうなりたい？の問いかけをする。

そして、年明けの始業式から毎日学校に行くため

はどんなことをしたらいいのか、周囲の人が整えることのできる、準備を母親と考えてみた。

毎日、お父さんが学校まで車で送る。最初は、少しの時間だけ登校して慣らししていく、担任教師にお願いをして、冬休みの間に登校練習をする。などの提案が挙げられた。

クラブ顧問の先生との衝突、選択科目の失敗など、さらっとではあるが学校関係者からの情報がカウンセラーの手元にある。くわしくたずねたい点があるが、あまりにも時間がない。

あと一日でも休んだら留年と切羽詰まっている今を『休まずに登校できたら次の進路へつながる』という見方に置き換えると少し柔らかく受けとめられるだろう。今はまだ彼女は何も失っていない。

幸い、この高校との取り決めで、カウンセリングに通った日の報告書を提出すれば、その日は、公欠とみなされることになっている。このように不登校状態にある生徒への支援策もこの私立高校は整っている。

さて、面接も終盤。

「では、マナミさんは、卒業したらどの学校に進みたいのかも一度資料を調べておいて下さい。次に来られた時は進路の話をししましょう。マナミさんがお母さんといっしょに来られて面接をしたと私は学校に連絡しておきます」

マナミの顔はにこやかだった。

続いて、回目の面接予約の日にちを決めるため、マナミと母親が打ち合わせをした。

「お母さんはいつでも良いの？」

「いいよ。マナちゃんは、学校に行った後でもここに来られる？」

「うん。大丈夫。お母さんは晩ごはんの用意はどうするの？」

「晩ごはんはお店で何かおかずを買ったらいいから、それでいいよ」

「ふーん」

比較的すんなりと次回の面接日が決まった。もう一度、日にちと時間を確認して面接の費用を受け取り、領収書を渡す。

相談に来られる家族の多くは、カウンセリング費用を封筒などに入れて準備し、支払い時は封筒ごと手渡されることが多い。が、マナミの母はかばんの

紙袋から出した現金を無造作にテーブルに置き、おつりと領収書を受け取った。

マナミは傍らでその様子をじっと目で追っていた。彼女の目前で、面接費用の受け取りをしてみずくなかったかな？と、気になりながらも初回面接は終了。

学校の男性カウンセラーに会ったときは、話さなかったらしいが、面接室でマナミは自分のこれからの希望を話した。

繊細な感じの娘さんと大柄でのんびりした印象のお母さん。次の予約決めるときは、もしかしたらマナミの方が母親よりも、気まわりができるような様子もあった。

次の面接につながりそうだ。この流れが続けば良いなど、そう思いながら二人を見送った。

面接前日「キャンセルしたいのです」

二回目の面接予定日の前日、マナミの母から電話があった。面接をキャンセルしたいという内容だった。母親の話すキャンセルのわけはマナミだった。

「これから毎日学校に行くから、もうカウンセリングには行かなくていい。面接にお金がかかるのだったら、必要ない」と、マナミが言っているという。

「マナミはカウンセリングに費用がかかることを知らなかったのです。一度、行かないと、言い出したら、きかないと思います。本人に黙って私だけが通ってもいいのですが、そのようなことも、嫌がりますので」と遠慮がちに話す。

経済的に難しい事情があるわけではないようだが、マナミは公立高校の受験に失敗し、私立に通うことになったのも、親に負担をかけて申し訳ないと考えている。そのようなことも母から伝えられた。

経済的なことに敏感なのには、改めてわけがあった。学校を欠席するようになってから、高校には内緒で、週に3回程度パン屋のアルバイトをしていた。そこで働くうちにお金の大切さを知ったようだという。パン屋で働く時の彼女の時給は750円だった。

つまり1回のカウンセリング料金の15000円は、彼女のアルバイト20時間分に相当する額なのだ。

アルバイトで稼ぐことができる元気があれば、それほど心配ないのかもしれないと思いながらも、こ

のあたりの気配りパターンが生活の中にいろいろと存在しているかも、と考えた。

経済的な自立に関する受けとめ方は、ひとそれぞれだ。家族の事情もあるだろう。マナミができれば親に迷惑をかけたくないと思っているなら、今後、母親ひとりで来所することを強くすすめるのはやめよう。後に引けない土壇場の中で、何か得るものがあり、力が湧いてくることもあるだろう。キャンセルについて家族の意向に従うことにした。

学校にその旨を伝えた。

マナミは新学期から二日間の欠席があったものの、そのあとは、全て登校していると状況がわかった。

登校できている！

さらに、これまで、高校側としては、卒業が明確でない時点で進路の話は持ち出せなかったが、カウンセリングを受けたあと「もしも卒業できるのなら専門学校に通いたい」と家族からの申し出があったと、進路希望に関する動きの情報も入ってきた。

母と娘がアクションを起こしている！

春、専門学校に進学したマナミ

4月、高校の担当者から新年度のあいさつとともに結果報告の電話が入った。

マナミは同級生よりもやや遅れて、三月末に卒業を迎え、春から専門学校に通っている。

「もともと、母さんがのんびりした人で、ぼくとつというか、かまわない人でした。でも、あのお母さんがカウンセリングに行ったり、専門学校の見学会に行ったり、それも娘さんの希望を確認しながら、そのあたりが良かったのだでしょうね。もちろん、マナミはラストかなり努力したと思いますよ」

母と娘の行動の呼吸が合ってきたのだろう。家族が考えて、前に進むことができ、それがひとつの流れになった。

彼女の進む専門学校は、高度な内容で授業数も多く、ついていくことはたやすくはないし、マナミのこれからの学校生活も、心配なく過ごせるとは言い切れない。しかし、『ラストスパート再登校』の経験が家族にとって、大きな意味を持つことは確かだろう。
